

『菅家後集』における「自詠」の詩の一考察

菅野禮行

菅原道眞の太宰府配所における作品を集めた『菅家後集』一卷は、

416 「自詠」と題する次の詩から始まっている。

離家三四月 家を離れて 三四月

落涙百千行 落つる涙は 百千行

万事皆如夢 万事 皆夢の如し

時時仰彼蒼 時時 彼の蒼を仰ぐ

この作品は、恐らく太宰府の官舎に落ち着いてから詠んだものであろう。道眞は、昌泰四年二月一日に京を出發している⁽²⁾のであるから、この詩は、昌泰四年の五月か六月ごろに作られたと考えてよい。

そもそも、『菅家後集』は、奥書きによると、

西府新詩一卷、今号後集。臨薨、封緘送中納言紀長谷雄。長谷雄見之、仰天而歎息。云云。⁽³⁾

とあって、道眞が薨ずるに臨んで封緘し、かつての高弟であった中納言紀長谷雄に送ったものである。いわば、道眞自身の撰になる遺言の詩集ともいべきもので、作品の配列も制作年代の順になっている。従って、この「自詠」の詩は、道眞自身が巻頭第一に置いたものと

考えられる。実際には未收録の作品が他に存していたかも知れない。しかしそれは、次のような事情を考慮すると、意圖的に収録しなかつたものと推察される。

道眞は、かつて自己の詩文集『菅家文章』十二巻を自撰した。それは、『菅家二代集』二十八巻の一つとして撰し、昌泰三年(九〇〇)、五十六歳の時、醍醐天皇に進獻したものであった。⁽⁴⁾後集の成る僅か二年半ほど前のことである。

その『菅家文章』巻一の中に、4 「賦得赤虹篇」と題する詩がある。道眞は、その題下に自ら注して、次のようにいっている。

自此以下四首、臨應進士舉、家君毎日試之。雖有數十首、採其頗可觀、留之。

すなわち、道眞が文章生の試験を受けるとき父是善から毎日のように作詩の指導を受け、數十首の習作があつたけれども、その中、よいもの四首だけを殘して留めるといふのである。

また、『菅家文章』巻一の冒頭の詩、1 「月夜見梅花」には、

于時年十一。嚴君令田進士試之、予始言詩。故載篇首。
という題下自注がある。この田進士とは、後に道眞の岳父となつた島田忠臣のことである。道眞の父是善が、當時十一歳であつた我が子の

作詩の指導を、島田忠臣にさせ、その教えのもとに始めて作ったのが、この1「月夜見梅花」の詩であるので、巻頭に収載するのだというのである。

これらの例は、道眞における自己の集の編纂態度をよく物語っているといえよう。すなわち、道眞は後世に残すべき自己の作品の選擇や配列に、十分な配慮をしていたのである。

従つて、今ここで問題にしようとしている476「自詠」の詩も、後集の開巻冒頭に置かれていること自體、少なからず重要な意味を持つてあろう。つまり道眞は、左遷當初における自らの心境を最もよく物語る作品の一つとして、この「自詠」の詩を意圖的に、後集の巻頭に置いたのではなからうか。「菅家後集」が、不遇の中に悶死した道眞の遺言詩集であるならば、幽囚の身であった作者が、當時、恐らくは明からさまには言えなかつたであろうと思われる心情が、この詩の中にも秘められているのではないだろうか。

二

まず初めに、この詩の題、「自詠」について考察しておきたい。

この自らを詠ずるといふ意味の詩題は、中國の詩人では、白樂天が比較的晩年において、好んで用いたもので、「自詠」と題する詩は『白氏文集』中に十二首あり、それもすべて後集にのみ見られるものである。この事實と道眞の476「自詠」の詩題とは、無關係ではあるまい。

道眞は、すでに三十七歳のとき(元慶七年八八三)、渤海の大使裴頰から「白氏の體を得たり」と評されていた。また、五十六歳のとき、醍醐帝に菅家三代の集を進獻した際にも、帝から「更に菅家の白様に勝ること有り」と稱讚された。

また、『菅家後集』中、476「自詠」の詩の次にある作品は477「詠樂天北窓三友詩」と題するものである。これは、白樂天の作品「北窓三友」の詩そのものを歌つたものである。さらに、金子彦二郎博士の調査によると、『白氏文集』中の詩題と同題のものは、『菅家文章』『菅家後集』を通して十八首存するといわれる。なお、類似の詩題や、白氏の詩句を題とするものなどまでを含めると、すべてで、四十六首の多きを數える。道眞の詩は、文章・後集合わせて五一四首であるので、この四十六首というのは、一割弱の多きに達するわけである。文集との同題の詩を『菅家後集』に限つても、476「自詠」の他にも一例478「不出門」がある。この詩題は『白氏文集』中に二例あつて、やはりこれも共に文集の後集の方に收められている。

以上は、道眞の詩に及ぼした『白氏文集』の影響が、いかに大きかつたかその一端を示す例であらう。なお、唐代の詩では、管見の及ぶ限りにおいては「自詠」と題する作品は他に見當たらぬ。従つて、道眞の476「自詠」といふ詩題は、明らかに白樂天の詩題によつたものであると考へてよいであらう。

しかし不思議なことに、この「自詠」の詩の詩的情趣という點になると、道眞と白樂天との間に大きな相違が見られる。それは、次に示すように同一題でありながら、むしろ極端に對照的でさえある。『白氏文集』中から、「自詠」の詩の若干の例を擧げてみよう。

一日復一日 一日 復た一日

自問何留滯 自ら問ふ 何ぞ留滯するや

△四句略▽

若待足始休 若し 足るを待ち始めて休まば
休官在何歲 官を休むこと 何れの歲に在らん

(後集、卷一)

悶發每吟詩引興 悶發これば 毎に詩を吟じて興を引く
興來兼酌酒開顔 興來たれば 兼て酒を酌みて顔を開く

△四句略▽

誰能頭白勞心力 誰か能く頭白くして 心力を勞せん
人道無才也是閒 人は道ふ 無才はまた是れ閒なりと

(後集卷五)

隨宜飲食聊充腹 宜しきに隨ひ飲食して 聊か腹に充つ
取次衣裳亦煖身 取次たがひにする衣裳も 亦た身に煖かなり

△四句略▽

隨分自安心自斷 分に隨ひ自ら安んじて 心に自ら斷ず
是非何用問閒人 是非何を用つてか 閒人に問はん

(後集、卷十一)

これらの内容はいづれも、白樂天が自らの分に應じて、その境遇に甘んじている心境を敍したものである。第一の例は蘇州刺史、第二の例は杭州刺史、第三の例は太子賓客として洛陽に、それぞれ在任中のものであった。⁽⁶⁾遙かに首都を離れた異境の地での作という點では道眞の478「自詠」の詩の作詩的背景と共通する。しかも題は、白樂天と同一詩題によつたものであった。それにもかかわらず、道眞の478「自詠」の詩に見られる詩的情趣は、白樂天のように悠々と自適する趣は片鱗も見られない。「落涙百千行」——落ちる涙も拂わずに、天を仰いで嘆息している。

これと同様なことは、「不出門」の詩においても指摘することができ。次に、道眞の478「不出門」と、白樂天の「不出門」とを掲げてみよう。

一 從謫落在柴荆 一たび謫落せられて 柴荆に在りしより

『菅家後集』における「自詠」の詩の一考察

万死兢兢踞踏情 万死兢兢 踞踏の情

都府樓纔看瓦色 都府樓は 纔かに瓦の色を看

觀音寺只聽鐘聲 觀音寺は 只だ鐘の聲を聽く

中懷好逐孤雲去 中懷は好し 孤雲を逐ひて去り

外物相逢滿月迎 外物は相逢ひて 滿月迎ふ

此地雖身無檢繫 此の地 身の檢繫せらるること無しと雖も

何爲寸步出門行 何爲れぞ寸歩も 門を行でて行かん

(『菅家後集』不出門)

彌月不出門 月に彌りて 門を出でず

永日無來賓 永日 來賓無し

食飽更拂牀 食飽けば 更に牀を拂ひ

睡覺一頓伸 睡り覺めて 一たび頓伸す

輕筆白鳥羽 輕筆 白鳥の羽

新篔青箭筠 新篔 青箭の筠ゆ

方寸方丈室 方寸 方丈の室

空然兩無塵 空然として 兩つながら塵無し

披衣腰不帶 衣を披て 腰帶せず

散髮頭不巾 髮を散じて 頭巾せず

袒跣北窗下 袒跣 北窗の下

葛天之遺民 葛天の遺民なり

一日亦自足 一日すら 亦た自ら足る

沉得以終身 沉んや以て身を終ふるを得るをや

不知天壤內 知らず 天壤の内

目我爲何人 我を目して 何人と爲すや

(『白氏文集』後集卷四、不出門)

不出門來又數旬 門を出でざるよりこのかた 又數旬

將何銷日與誰親 何を將ってか日を銷し 誰と與に親しまん

鶴籠開處見君子 鶴籠開く處 君子を見

書卷展時逢古人 書卷展ぶる時 古人に逢ふ

自靜其心延壽命 自ら其の心を靜かにして 壽命を延べ

無求於物長精神 物に求むること無くして 精神を長ぜしむ

能行便是眞修道 能行は便ち是れ 眞の修道

何必降魔調伏身 何ぞ必ずしも 降魔調伏の身のみならんや

〔『白氏文集』後集卷九、不出門〕

白樂天が自ら閉居の生活に甘んじ、名利にとらわれず、精神の安定を得ているのを歌うのに對して、道眞は、「萬死兢兢踴躍の情」とい、「何爲れぞ寸歩も門を出でて行かん」と歌って、ひたすら謹慎蟄居の表情を示している。

従來、道眞の文學について、白樂天の影響關係が密接に認められるとする説と、それほど認められないとする説とがあった。前者を主張される代表的なものは金子彦二郎博士である。同博士は、特に『増補、平安時代文學と白氏文集——道眞の文學研究篇第二冊——』の中で、道眞と白樂天との關係を詳細に論じられた。後者のそれは、小西甚一博士である。同博士は、「最も白詩の體を得たといわれる菅原道眞にしても、全作品について白詩的要素を索めるならば、さほど濃厚でもないことがわかる」として、道眞はむしろ六朝の詩風により多くよっていることを論じておられる。いずれを是とするか輕輕には論じられまい。いずれにせよ白詩の道眞詩への影響關係について、複雑な要素があることは確かであろう。

前述したように、菅原道眞における代表的な詩の中には、題や表現

が明らかに白詩に依據していると思われるのに、文學作品にとって最も大切であるはずの詩的情趣そのものが全く隔絶したものであるのは、何を意味するものであろうか。道眞の詩の本質を解く鍵の一つは、その點の解明にもあるようである。

三

さてひるがえつて考えて見ると、菅原道眞の時代は、本邦初の漢詩集『懷風藻』が成立（七五一年）してから、すでに百四十年近くの歲月を經過している。従つて、道眞のころは、もう中國詩の口移しの模倣の時代ではなくなつていた。だから道眞が、中國詩の形式を借りながらも、そこに自己の主體的な詩人的本領を發揮しようとしても不思議ではない。また、道眞は遣唐使廢絶を建言し實現せしめたその人でもある。いかに當時、白氏流行の時代であつたとはいつても、當代隨一の碩儒でもあつた菅原道眞が、白樂天一邊倒であつたとも思えない。

事實、講經や史書などの詠史、竟宴の詩は、文章六卷中に次のように多く見られる。

9 八月十五夜、嚴閣尙書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲。并序。

14 仲春釋奠、禮畢、王公會都堂、聽禮記。

23 仲春釋奠、聽講論語。

28 仲春釋奠、聽講孝經、同賦資事父事君。並序。

34 史記竟宴、詠史得司馬相如。

41 仲春釋奠、聽講毛詩、同賦發言爲詩。

43 王度讀論語竟。聊命盃酌。

55 仲秋釋奠、聽講周易、賦鳴鶴在陰。

63 漢書竟宴、詠史得司馬遷。

81 仲春釋奠、聽講孝經。

88 仲春釋奠、聽講左傳、賦懷遠以德。

91 後漢書竟宴、各詠史、得光武。

139 八月釋奠、聽講孝經、賦秋學禮。

145 勸學院、漢書竟宴、詠史得叔孫通。

146 相國東廊、講孝經畢。各分一句、得忠順弗失而事其上。

右は卷一・二所收のものであるが、他の巻にも371(古文孝經)、370(禮記)、372(漢書)、382(論語)、437(文選)などの作品がある。

そこで、冒頭に掲げた476「自詠」の詩において、天を仰ぎつつ「家を離れて三四月、落つる涙は百千行……」と歌う表現には、白樂天以外の影響は見られないであろうか。また、この詩の中心である感傷的な感情の本質は何であろうか。それを、逆境にあえぐ落魄の涙とのみ割り切ってしまったてよいであろうか。それらについて、以下考察を進めてみたい。

たしかに、道眞の文學の特質の一つは、感傷性にあるといわれている。たとえは、

父子一時五處離 父子一時に 五處に離る

口不能言眼中血 口言ふこと能はず 眼中の血

(477 詠樂北窓三友詩)

我爲遷客汝來賓 我は遷客たり 汝は來賓

共是蕭蕭旅漂身 共に是れ蕭蕭として 旅漂の身

(480 聞旅雁)

形馳魂恍惚 形馳せて 魂恍惚たり

目想涕連連 目に想ひて 涙連連たり

『菅家後集』における「自詠」の詩の一考察

京國歸何日 京國 歸らんこと何れの日ぞ

故園來幾年 故園 來たらんこと幾ばくの年ぞ

(484 叙意一百韻)

月光似鏡無明罪 月光は鏡に似たれども 罪を明らむることなし

風氣如刀不破愁 風氣は刀の如くなれども 愁ひを破らず

隨見隨聞皆慘慄 見るに隨ひ聞くに隨つて 皆慘慄

此秋獨作我身秋 此の秋は 獨り我が身の秋と作りたり

(485 秋夜)

人慚地獄幽冥理 人は 地獄幽冥の理に慚づ

我泣天涯放逐辜 我は 天涯放逐の辜に泣く

(493 南館夜聞都府禮佛懺悔)

人是同人梅異樹 人は是れ同じき人なるも 梅は樹に異なれり

知花獨笑我多悲 知る花のみ獨り笑みて 我は悲しみの多きことを

(495 梅花)

不計悲愁何日死 計らず 悲秋して何れの日にか死せんことを

堆沙作壙菝編垣 沙を堆くして壙を作り菝垣を編みたり

(497 種菊)

遷客悲愁陰夜倍 遷客の悲愁は 陰夜に倍せり

冥冥理欲訴冥冥 冥冥の理は 冥冥に訴へんと欲す

(500 燈滅一絶、其二)

のとき詩句を見ると、一家の離散を歎き、望郷の悲痛な思いにかられ、天涯放逐の境涯に泣きながらも、無實を天に訴え續ける道眞の叫びが聞こえてくるかのようである。

この他の作品には、佛教や老莊の哲學に、精神の救いを求めんとする傾向も見られないわけではない。しかし、『菅家後集』全體を流れ

る敘情は、いま示した例に代表されるような、際立った感傷性にあるのである。

ところで、このような、道眞の詩における感傷性は、彼の人生の生き方とどのようにかわるものであろうか。それが、單なる個人的な自己の境遇を悲しむところにのみ根ざしているとは、私には思えない。また、かつての榮光の座、失われた日々等に對する感傷的な回想を、より多く含むものとも思えない。「一生愛ふ」といわれた、詩聖杜甫の歎きは、自己の放浪の境遇に端を發してはいても、より多く國の將來を憂うるスケールの大きな叫びであつた。本來、中國の詩は、自然を歌うように見えるものでも、人生や社會にかかわりを持つ作品が、より多く格調の高いものであるという一般的な傳統がある。中國の學問や教養を身につけた、當代一流の碩學道眞のことである。いかに陰慘を極めた極限状態の下であつたとはいへ、その人の文學が單なる個人的な悲哀感を歌うのに終始したとは思えない。道眞の詩には、感受性や素材、また表現のしかたなどに、個人や私的な範圍にとどまるよりも、廣く人間全體や社會的背景の問題にまで立ち入ろうとする傾向があるのも否定できない。一例を挙げれば、

何人寒氣早 何れの人に 寒氣早き

寒早走還人 寒は早し 走還の人

案戸無新口 戸を案するも 新口無く

尋名占舊身 名を尋ねては 舊身を占ふ

地毛郷土瘠 地毛 郷土瘠せたり

天骨去來貧 天骨 去來貧し

不以慈悲繫 慈悲を以て繫がざれば

浮逃定可頻 浮逃 定めて頻りなるべし

に始まる十首の連作200〜209「寒早十首」は、貧窮な者への同情をこめた痛烈な社會諷刺である。また、211「路遇白頭翁」と題する樂府體の詩には、白樂天の諷諭詩「新豐折臂翁」の投影が見られる。このような白氏の諷諭精神の影響は、我が國の假名文學の世界にはなかつたことであり、道眞の文學を考察するに當たり大いに注目すべきことである。

特に、人間の生き方にかかわる重大な問題を詩に歌おうとするのは、そのこと自體が、すでに中國的である。

道眞が、本當に冤罪ならば、流謫の地太宰府で切實に歌つた詩の中に、公憤とか憂國の情などの片鱗でもうかがえないものであろうか。しかし、『菅家後集』の中には、わずかに役人の腐敗ぶりを歌う詩句があるくらいで、そのあからさまな表現を見出すことができない。恐らく、嚴しい監視下にあつては、道眞は最もいいことも言えなかつたのではあるまいか。そういう中でも、敢然として言うことができ、勇氣までは持てなかつたのか。却つて、そのような發言をすること、自らの生命を縮める結果になる豫感があつたのか。その真相は、わからない。

いずれにしても、道眞ほどの人物である。そして、『菅家後集』は、遺言の詩集でもある。それならば、自己の本當の眞情をこの詩集のどこかに託してはいないであらうか。そのことを、さらに476「自詠」の詩に検討を加えることで、考察を深めて行きたい。

四

476「自詠」の詩は、冒頭にも掲げたように、「離家三四月」の句で歌い出されている。なかでも特に、句頭におかれている「離家」とい

う表現に注目して、以下考察を廻らせてみたい。

この「離家」ということばは、道眞はこれまでに文章中の詩において、三度用いている。その中の二例は、次に示す讃岐守在任中のものである。

客有離家者 客に家を離るる者有り

看覽瀧血啼 瀧を見て 血を瀧ぎて啼く

(236舟中五事、其三)

離家四日自傷春 家を離れて四日 自ら春を傷む

梅柳何因觸處新 梅柳何に因りてか 觸るる處に新たなる

(238題驛樓壁。入歸州之次、到播州明石驛。自此以下八十首、自京更向州作)

前者は、作者四十三歳の秋、讃岐より暇を乞うて歸京する途中の作である。獵師に母を打たれ故郷を失った鹿の子たちが、必死に海を渡るのを見て、故郷を遠く離れている我が身につまされ、作者も血を吐く思いで泣いているというのである。

また、後者は、その年京都で越年した作者が、讃岐へ歸任の途中、明石での感慨を歌ったものである。京都の家を離れて四日目、梅や柳がどこまでもあざやかな春の風景を前にして、この詩句も感傷的な氣分に浸っていることを詠んでいる。この感傷的な氣分には、故郷や妻子と遠く離れたというだけではない次のような理由があった。

道眞は、仁和二年(八八六年、四十二歳)五月十六日の除目で、それまでの式部少輔、文章博士、加賀權守等の任を解かれて、讃岐守に任ぜられた。これは、事實上の左遷である。やはり、學閥間の抗争の結果であったといわれている。従って、心安い人々の開いてくれた送別會の席上で、道眞は、

讚州刺史自然悲 讚州の刺史は 自然に悲し

『菅家後集』における「自詠」の詩の一考察

悲倍以言贈我時 悲しみは倍す 言を以て我に贈らるる時に

(185尚書左丞鏡席、同賦贈以言、各分一字。探得時字。)

我將南海飽風煙 我は將に南海に風煙に飽きんとす

更妬他人道左遷 更に妬む 他人の左遷なりと道ふことを

情憶分憂非祖業 情憶ふ 分憂は祖業に非ざることを

徘徊孔聖廟門前 徘徊す 孔聖廟門の前

(187北堂鏡宴、各分一字。探得遷。)

などのように悲歎にくれている。これまで、文章博士として、三代に亘る名門學閥を主宰してきたのみならず、宮廷の内外に重きをなしていた道眞にしてみれば、地方官として赴任することを喜ばず、大學寮の孔子廟の前を立ち去りがてに徘徊するのも、當然のことであった。「情憶分憂は祖業に非ざることを、徘徊す孔聖廟門の前」と歌うこの句には、自分の本業は京にいて學問の道にたずさわることであった、決して外官となることではないとする強い自覺が、明確に讀みとれる。

従って、赴任の旅も、

春送客行客送春 春は客行を送り 客は春を送る

傷懷四十二年人 傷懷す 四十二年の人

思家淚落書齋舊 家を思ひて涙は落ち 書齋舊りしならんと

在路愁生野草新 路に在って愁は生じ 野草新たなり

△以下略▽

(188中途送春。△以下二首、行路之作▽)

などのように鬱々として心晴れやらぬものがあつた。

まして、實際の任地では、

人散閑居悲易觸 人散じて閑居すれば 悲しみ觸れ易し

夜深獨臥淚難勝 夜深けて獨り臥すれば 淚勝へ難し

(219行春詞。七言廿韻。)

釣歌漁火非交友 釣歌漁火 交友に非ず

抱膝閑吟淚濕巾 膝を抱きて閑吟すれば 淚巾を濕す

(222晚春遊松山館。)

などのごとく、感傷的な孤獨感にさいなまされている。この種の感傷的心情表現は、後年の太宰府謫居時代におけるそれも、少しも變わらなかつた。

そればかりか、239「冬夜閑居話舊、以霜爲韻」と題する詩の中には、

不恨寒更三五去 寒更三五去らんことを恨みず

無堪落淚百千行 落淚百千行に堪ふること無し

のごとく、476「自詠」の詩の「落淚百千行」の句と全く同じ語彙の表現がなされている。

以上考察してきたように、「離家」ということばといい、「落淚百千行」の句といい、時を隔てて作られた作品の中に、左遷の境遇や心境を歌う表現として、それらが共に用いられていることは、偶然の暗合なのであろうか。次に述べるように、やはり道眞は、重要な詩語として意圖的に476「自詠」の詩の語彙を選び用いているように思われる。

五

「落淚百千行」は、まさに淚滂沱として頬を傳うさまを述べた、感傷的表現の詩句である。いかにも典故ありげに思われる句であるが、残念ながらいまだ詳らかにし得ない。

問題は、476「自詠」の詩の冒頭における「離家」ということばである。前述したように、この語は道眞の讃岐守在任中に、二回の使用例

を見る。「離家」ということばに典故があるとすれば、何に基づくものであろうか。

そもそも、故郷の家を離れ、遠行する意味のことばには、「去國」「辭國」「離居」「離家」などさまざまな表現がある。

いま、初唐詩の中から、それらに類する語の用例のいくつかを、『全唐詩』によって次に掲げてみよう。

離居分照耀 離居 分かれて昭耀せられ

怨緒共裴徊 怨緒 共に裴徊せん

(駱賓王、望月有所思)

生死久離居 生死 久しく離居し

淒涼歷舊廬 淒涼 舊廬を歴たり

(喬知之、哭故人)

水國生秋草 水國 秋草生じ

離居再及瓜 離居 再び瓜に及ぶ

(張說、岳州作)

離居久遲暮 離居 久しく遲暮し

高駕何淹留 高駕 何ぞ淹留たる

(沈佺期、擬古別離)

離居欲有贈 離居 贈ること有らんと欲し

春草寄長謠 春草 長謠に寄す

(沈佺期、登瀛州南城樓寄遠)

去國年方晏 去國 年方に晏れ

愁心轉不堪 愁心 轉た堪へず

(張說、廣州江中作)

將余去國淚 將に余が去國の淚

灑子入郷衣 子が入郷の衣に灑がんとす

(張説、嶺南送使)

抱愁那去國 愁ひを抱きて 那ぞ國を去らん
將老更垂裳 將に老いんとして 更に裳を垂る

(沈佺期、答廳賦代書寄家人)

猶憐慣去國 猶ほ憐む 國を去るに慣るるを
疑是夢還家 疑ふらくは是れ 家に還るを夢みるか

(盧僕、歲晚還京臺城關成口號先贈交親)

去國三巴遠 國を去ること 三巴遠く

登樓萬里春 樓に登る 萬里の春

(盧僕、南望樓)

遠人夢歸路 遠人は 歸路を夢み

瘦馬嘶去家 瘠馬は 去家に嘶く

(張説、岳州作)

長沙辭舊國 長沙 舊國を辭し

洞庭逢故人 洞庭 故人に逢ふ

(王熊、奉別張岳州說一首其二)

丈夫期報主 丈夫 主に報いんことを期して

萬里獨辭家 萬里 獨り家を辭す

(鄭愔、塞外三首其一)

離別家郷歲月多 家郷に離別して 歲月多く

近來人事半銷磨 近來人事 半ばは銷磨す

(賀知章、回郷偶書二首其二)

そして、今問題にしている「離家」という語は、ここに掲げた「去家」「辭家」などと同様に、初唐詩の中では使用例の少ないものの方

に屬し、わずかに次の例を見出すことができる。

天長地闊嶺頭分 天は長く地は闊く 嶺頭分かれ

去國離家見白雲 國を去り家を離れて 白雲を見る

(沈佺期、善同社員外審言過嶺)

さて、この用例を見ると、「去國離家」といっているので、「離家」とは、國都を去って異境の地に漂泊の身となることを意味していることがうかがえるであろう。

なお、盛唐詩については、すべての詩句に當たったわけではないけれども、可能な限り索引等を利用しての調査では、李白や岑參などに次のような用例を見出すことができる。

離家未幾月 家を離れて 未だ幾月ならず

絡緯鳴中閨 絡緯 中閨に鳴く

(李白、贈范金鄉二首其二)

曾隨上將過祁連 曾て上將に隨つて 祁連を過ぎ

離家十年恆在邊 家を離れて十年 恆に邊に在り

(岑參、送費子歸武昌)

走馬西來欲到天 馬を走らせて西來 天に到らんと欲す

離家一作離見月兩回圓 家を離れてより 月の兩回圓かなるを見る

(岑參、磧中作)

右の李白の例は、黃錫珪説に従えば、天寶八載(七四九)五月の作で、作者が長安を追放されて後、五年目ごろの放浪中の作品と推定される。岑參はいうまでもなく邊塞詩人として有名で、ここに挙げた例は、長安を遠く離れて、邊境の地にあることがすでに久しいことを敍した詩句である。

なお、杜甫には「離家」の用例はなく、中唐に入って、韓愈、元稹、

白居易などの詩にも使用例はないものようである。

晩唐の温庭筠には、

至今留得離家恨 今に至るまで留め得たり 離家の恨み

雞犬相聞落照明 雞犬相聞こえて 落照明かなり

(過新豐)

の例がある。

以上の用例から、「離家」という語は、都もしくは家郷を遠く離れることを意味するものと見なしてよいであろう。例えば、「家を離れて」どこそこに向かうといった場合、その目的とする場所は、都や故郷など以外の場所である。換言すれば、旅先きの住まいから歸京もしくは歸郷する場合に、「離家」とはいわないのである。

このようなことを考えると、「離家」という語には、左遷や追放、或は失意や不満の旅立ちといったような特殊な事情にまつわる一種の悲哀感を、言外に感得せしむるがごとき用法が實際には多かったのではなからうか。我が國の朱鳥元年(六八六)十月三日、謀叛の罪に問われ二十四歳の若さで死を賜った大津皇子に、「臨終」と題する次の詩がある。

金鳥臨西舍 金鳥 西舍に臨み

鼓聲催短命 鼓聲 短命を催す

泉路無賓主 泉路 賓主無し

此夕離家向 此の夕 家を離れて向かふ

(懷風藻)

「金鳥」は、太陽の意。一讀して悲痛の極みである。特に「離家」の語を含む結句には、壯絶な悲哀感すらただよっている。

「離家」の語にまつわる、そのような獨特な悲哀感は、さかのぼっ

ていくと、實は次に掲げる『楚辭』九辯の「離家」にまで至るようである。

去鄉離家兮徠遠客 郷を去り家を離れて 徠りて遠客たり

超逍遙兮今焉薄 超かに逍遙して 今焉かにか薄まらん

(楚辭)九辯

王逸は、九辯の作者を屈原の弟子宋玉であるとして、次のようにいう。

九辯者、楚大夫宋玉之所作也。云云。宋玉者、屈原弟子也。閔惜

其師忠而放逐。故作九辯、以述其志。

すなわち、師の屈原が忠誠でありながら放逐されたのを閔惜して、宋玉が屈原の氣持ちを代辯したのであるという。これに對して九辯を屈原自身の作とする説もあるが、やはり、宋玉の作と見るのが、今日通説となつていようである。

そもそも、屈原は戰國時代の楚の忠臣で、懷王に仕え三閭大夫となつた。當時、緊張した國際狀勢の中で、楚國內における國論は親齊派と親秦派とに對立し、内政も混亂していた。屈原は、そうした中で親齊論を主張し、内政の亂れも立て直そうとしたが、反對派の讒言に遇い追放された。かくして彼は、祖國が亡國の運命をたどるのを見るにしのびず、遂に汨羅の淵に身を投げて自殺した。實際、楚は後日、秦の始皇帝によつて亡ぼされたのである。

九辯の作者が、屈原であるにせよ宋玉であるにせよ、「去鄉離家兮徠遠客、超逍遙兮今焉薄」の句は、王逸が、

去鄉離家兮。(王注)背違邑里之他邦也。

徠遠客。(王注)去郢南征、濟沅湘也。

超逍遙。(王注)遠去浮遊、離州域。

今焉薄。(王注)欲止無聲。皆讒賊也。

と、それぞれの部分に注するように、讒言によって王室を追放され、故郷を遠く離れて沅湘の間に漂泊する、屈原という失意憂國の人の姿を歌ったものであることは疑えない。前に掲げた沈佺期の「去國離家」の句も、實はこの『楚辭』の表現をふまえてのことであつたと思われる。

いずれにしても、道眞の邸「自詠」の詩句における「離家」の語は、以上に擧げた『楚辭』をはじめ、中國詩句の用例をふまえたものであることがわかる。そしてその根底には屈原を意識し、その心情にあやかろうとしていたのではなかつたかと思われる。その意味では道眞の詩句中の「離家」の語に、より深い注意を向ける必要がある。なおそのことは、『菅家文章』卷一所收の75「秋日山行二十韻」と題する詩の、冒頭の部分の表現によつても推察することができる。その詩は、

行行山不盡 行行 山盡きず

念念意無聊 念念 意聊しむこと無し

步曆三秋暮 曆を歩す 三秋の暮

離家五日朝 家を離る 五日の朝

と歌い出す、作者二十三歳の時の作品で、時に民部少輔であつた。この詩の題下自注には「于時祈神、向越州社」と記す。つまりこの作品は、作者が越前の氣比神社に參詣したときのものであることが知られる。従つて、左遷とか流謫などの旅ではない。だからといつて、川口久雄博士もいわれるように、「民部少輔としての公務もあり、渤海客使の來航する敦賀の津に關心もあつたであらう」旅であつて、決して物見遊山を目的としての旅ではなかつた。いわば公務出張であり、その上、當時としては、京都から敦賀まではかなりの困難を伴う旅であ

『菅家後集』における「自詠」の詩の一考察

つたと思われる。

一方、このころの京における官吏としての道眞は、

風送宮鐘曉漏聞 風は宮鐘を送りて 曉漏聞こゆ

催行路上雪紛紛 行を催す路上 雪紛紛たり

△四句略▽

衙頭未有須臾息 衙頭には未だ有らず 須臾も息はんことを

呵手千廻著案文 手を呵みて千廻 案文を著す

(73雪中早衙)

廻燈束帶早衙初 燈を廻らして束帶す 早衙の初め

不倦街頭策蹇驢 倦まず街頭に 蹇驢に策つことを

△以下一句略▽

(74早梅)

などの詩句に見られるように、民部省においてまことに模範的な精勵格勤の毎日であつた。

そのような道眞であつたから、此の度の敦賀への長旅で、遠く京を離れ旅愁に沈みがちな心境を、屈原になぞらえているのではないかと思われる節がある。それというのも、「秋日山行」の詩の、冒頭の部分にまず注目したい。

行行山不盡、念念意無聊。

この「念念意無聊」と歌つて、日々の旅の思いはわびしくて楽しめない」と歎くのは、『楚辭』九思に、

心煩憤兮意無聊 心煩憤して 意聊しむこと無し

とあるのに基づく表現である。

ちなみに、第一句の「行行山不盡」は、古詩十九首の

行行重行行 行行 重ねて行行

與君生別離 君と 生きながら別離す

をふまえた表現であろう。従つて、「行行山不盡」の句には、古詩十
九首の「與君生別離」という緊迫した感情がたゞよっているように思
われる。そのような緊張感を内に伴つた表現は、それに續く「念念意
無聊」という、屈原を連想させる句の前提として、まことに效果的な
措辭である。

このように考えてくると、この句の後に一句おいて、すぐ「離家五
日朝」のごとく「離家」ということばが出てくるのは、やはり前述し
たような意味での「離家」の用例を意圖的にふまえてのことであつた
といえるであろう。

次に章を改めて、道眞のその他の詩における『楚辭』あるいは屈原
の投影を検討し、476「自詠」の詩の心情的背景などに及んでみたい。

六

道眞の詩における『楚辭』の投影は、前述したものにのみにとどま
らないものがある。以下、その他の若干の例を掲げてみよう。

蘭傷九畹叢 蘭は傷はる 九畹の叢

(13秋風詞)

は、すでに川口久雄博士が指摘された通り、離騷の

余既滋蘭之九畹兮 余 既に滋えし蘭の九畹あり

に基づく表現である。また、

魂也歸來何處憑 魂や歸り來たつて 何れの處にか憑る

(93奉和兵部侍郎哭舍弟大夫之作)

は、招魂の

魂兮歸來 魂よ 歸り來たれ

去君之恆幹 君の恆幹を去りて

何爲乎四方些 何爲れぞ 四方する

をはじめ、招魂篇の中に頻出する

魂兮歸來 魂よ 歸り來たれ

の句をふまえた表現である。さらに、

食資楚屈原 食は資く 楚の屈原

(289寄白菊)

湘水水齋滌 湘水 水は齋滌たり

(484叙意一百韻)

などは、屈原そのものを直接的に詩句中に歌っている例である。前者

は、離騷の中の有名な

朝飲木蘭之墜露兮 朝には木蘭の墜露を飲み

夕餐秋菊之落英 夕には秋菊の落英を餐らふ

をふまえている。これによって、道眞は自分の家の白菊の花は、屈原

のよい食べ物となるであろうと、屈原の名を出したものである。また

後者は、湘水上流の汨羅に身を投じた屈原の故事を背景としている。

これによって道眞は、太宰府配流中の心境を述べた長編の詩484「叙意

一百韻」の中に、自らの思いを託したものであつたらう。

さて、前述したように、476「自詠」の詩は『菅家後集』冒頭の商品

であつた。すなわち、流謫の地太宰府における最初の作と考えられ

る。昌泰四年(九〇一)の四、五月ごろの制作であつた。また、悲痛

陰慘を極めた流謫の様子をあますところなく訴えた傑作484「叙意一百

韻」が成つたのは、やはり同じ年の秋である。

ここで道眞左遷の経緯をふりかえってみよう。昌泰四年一月、全く

突如として道眞追放の宣命は下つたのである。右大臣という榮光の座

から、急轉直下、大宰權帥への左遷である。『政事要略』によると、道眞左遷の宣命を載せて次のようにいう。

不知止足之分、有專權之心。以佞諂之情、欺惑前上皇之御意。云云。離間父子之慈、淑皮（一作破）兄弟之愛。（卷二十一）

つまり道眞は、止足の分を知らず專權の心があつて、佞諂の情をもつて宇多上皇を欺き、醍醐帝を廢して天皇の弟齊世親王を立て、父子兄弟の慈愛を絶たしめんとした、というのである。これが眞實なら事は重大である。しかし不思議なことに、道眞はライバルの藤原時平と共に、左遷のわずか十八日前に従二位に敘せられている。さらにまた、道眞左遷の事は宇多上皇に對して、全く祕密裡に斷行された。しかも、道眞を厚く信任していた上皇は、急を聞いて參内し開門を迫つて嘆願しようとしたが、警固の者にはばまれて功を奏さなかつた。

このようなことから、坂本太郎博士は、天皇廢立の證據があるならば、上皇に對しても十分に説明ができるはずであるとし、上皇の參内をかたくなに拒否し續けた朝廷の態度こそ、道眞左遷の正當性を弱めるものであると主張された。また、所功氏は、論文「菅原道眞の配流」（『菅原道眞と太宰府天満宮』上巻、所收）の中で、道眞およびその周邊に（宇多上皇を含めて）、天皇廢立の計畫などは全くなかつたことを論證し、時平の讒言によつて貶逐される経緯を詳述している。

とにかく道眞は、藤原時平の讒言と周到に計畫された陰謀によつて、西府へ遷謫の憂き目に遭つた。のみならず、道眞自身か

自從勅使駈將去 勅使 駈り將て去りしより

父子一時五處離 父子は一時に 五處に離る

（竹歌樂天北畠三友詩）

と歌うように、果は子供達にも及び男子は諸國に配流という厳しいも

のであつた。

榮光の座からの轉落、一家の離散、配所における陰慘で苛酷な生活、それらはすべて道眞にとつて堪えがたいものであつたに相違ない。さればこそ、第三章で例に掲げたような感傷的な表現をもつて、自己の心境を歌つたものであつたらう。

しかしながら、道眞におけるそのような感傷的表現は、單なるセンチメンタリズムから生じたものではないように、私には思われる。自らの逆境を、單なる個人的な感傷をもつて歎き悲しんでいるばかりではない。すでに述べ來たつたように、道眞は自らを屈原になぞらえていた。屈原は三閭大夫という高官にありながら、讒に遇つて放逐された憂國の士である。道眞が心情的に屈原に共鳴するのも、故なしとしない。

そのように考えてみると、道眞が476「自詠」の詩の中で「落涙百千行」と歌いつつ流す涙は、中央の政情の成り行きや、國家の將來を憂うる眞情に、より深く基づくものであつたと推察される。

また、有名な482「九月十日」と題する作品、

去年今夜待清涼 去年の今夜 清涼に侍し

秋思詩篇獨斷腸 秋思の詩篇 獨り斷腸

恩賜御衣今在此 恩賜の御衣は 今此に在り

捧持毎日拜餘香 捧持して毎日 餘香を拜す

は、從來、作者が冤罪をこうむりながらも天子をいささかも恨まない忠愛の眞情を表したものと一般に解釋されて來た。むしろこの解釋が當を得ていないわけではない。しかし、それをあまり強調しすぎると、この詩の結句は、かつての榮光の座への懐古的な感傷を歌つたものに過ぎなくなるであらう。齡すでに五十七歳の道眞である。單なる

感傷的な回想でのみ、恩賜の御衣を捧持して毎日餘香を拜するものであろうか。この482「九月十日」の詩が作られた數か月前には、476「自詠」の詩ができていたのであった。やはり、この482「九月十日」の作品にも、より大きな國家的スケールの視野に立って、物事を見すえようとしている道眞の姿を見る思いがするのである。

いうまでもなく、配所では、深い挫折感やいい知れぬ孤獨の思いが道眞を間斷なく襲っていたことであろう。道眞も人間である以上、菅原氏の没落を歎き、無念の涙にくれることも再三ならずあったに相違ない。事實、そのような心情を表現している作品が『菅家後集』の中にいくつかは見られる。

しかし、左遷當初における心境は、476「自詠」の詩を中心として考察してきたように、多分に屈原を意識したもののようである。

ただ道眞は、憂國の心情を、屈原のように明からさまには直敘しなかった。『楚辭』的な表現を通して、それとなく暗喩の中に訴えかける方法を取っている。だからといって、道眞を怯懦をもって責めることはできない。あの廣い中國で、湘江のほとりを漂泊した屈原とは、そもそも生活の形態が違う。太宰府の配所における、監視付きの道眞にしてみれば、やはり自らの眞情を直接に吐露することは不可能であったのであろう。そういう道眞にとって可能なことは、心ある人々にそれとなくわかつてもらうことであった。従って、『江談抄』に次のような記述があるのは、それを側面から物語るものである。

離家三四月。落涙百千行。

萬事皆如夢。時々仰彼蒼。

雁足粘將疑擊帛。鳥頭點着憶飯家。菅家。

此句。謫居春雪絶句也。而天曆之時於比良宮御託宣有之。志於

我之者。可詠此等句。云云。(卷四)

右に引用されている五言の詩は、いうまでもなく道眞の476「自詠」の詩である。その次の七言の詩句は、道眞の絶筆514「謫居春雪」と題する七絶の第三・四句である。「雁足云云」は、蘇武の故事に、「鳥頭云云」は、燕の太子丹の故事によって、望郷の悲痛な思いを述べる。いずれにしても、『江談抄』の所説は、天曆年間(九四七—九五七)に道眞の靈の託宣があつて、「我に志あらんものは、此れらの句を詠すべし」と告げたというのである。

託宣の眞偽のほどはともかくとして、『江談抄』成立時に、早くもこのような話が存在していたのは事實である。それは、476「自詠」の詩や、絶筆となつた作品の最後の詩句に、道眞の深い心を讀みとるべきだと感じていた人々が、當時すでにいたことを物語るものである。

流謫の地太宰府における道眞は、悲哀に満ちた孤獨な生活を強いられた。作者が彼の地に悶死するまでの約二年間に歌つた、いわば遺言の詩集『菅家後集』一卷には、悲しみの詩が多い。道眞が感傷の詩人と目される理由もそこにある。しかし、前述してきたように、道眞の感傷は、單なる個人的悲哀にとどまるものではなかつたのである。それは、個人や私を超えて、より廣く社會や國家の現状と將來がこれでよいのかという、憤激を底にたたえていたものではなかつたろうか。考えてみれば道眞は、配所での悲哀、屈辱、孤獨などに對して、自らを暗に屈原に比することで、身の潔白を主張し、また慰めを得ていたのかも知れない。

最後に、林羅山は、476「自詠」の詩は杜甫の作との偶然の暗合であるといっている。しかし、杜甫に今日この詩はない。道眞と杜甫との

關係については、機を改めて考えてみたい。

(58・2・1)

- 註(1) テキストは、川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』(日本古典文學大系)による。なお、算用數字は同書の商品番號。以下同じ。
- (2) 『日本紀略』による。なお、『菅家御傳記』には、二月一日とする。
- (3) 尊經閣所藏の寫本の一本(大系本『菅家後集』の底本)や、彰考館藏寫本、群書類従本などには、この奥書きはあるが、貞享板本などにはない。
- (4) 774「獻家集狀」(大系本、六一八ページ)参照。
- (5) テキストは汪立名本。以下同じ。
- (6) 119「余近敍詩情怨一篇、呈菅十一著作郎、長句二首、偶然見酬、更依本韻、重答以謝。△二首、其二▽」の詩の自注に、「禮部侍郎、得白氏之體」とある。なお、禮部侍郎とは治部大輔の唐名で、ここでは道眞をさす。
- (7) 貞享板本『菅家後集』所收の醍醐天皇の御製「見右丞相獻家集」に、「更有菅家勝白様」とある。なおこの御製は、大系本にも收める。
- (8) 金子彦二郎著『増補、平安時代文學と白氏文集——道眞の文學研究篇第三冊』昭和五十三年四月五日、藝林舎刊。一〇一ページ。
- (9) 花房英樹著『白氏文集の批判的研究』△朋友書店再刊本▽による。以下、白詩の制作年代などは本書による。
- (10) 底本「泉」に作る。一本によりて改む。
- (11) 小西甚一博士「古今集の表現の成立」△『日本學士院紀要』第七卷第三號所收、昭和二十四年十一月十二日刊。
- (12) 道眞の罪狀の事實關係については、後述。
- (13) 484「敍意一百韻」参照。
- (14) 阿部猛著『菅原道眞』、一〇一ページ。
- (15) 小嶋憲之校注、日本古典文學大系本。

『菅家後集』における「自歎」の詩の一考察

- (16) 星川清孝著『楚辭』(新釋漢文大系所收)、二八二ページ。
- (17) 『菅家文章・菅家後集』(日本古典文學大系所收)、六五三ページ、補注。

- (18) 前掲書、六三九ページ、補注。
- (19) 道眞の女は、齊世親王の室であった。△『尊卑分脈』▽
- (20) 『公卿補任』、醍醐天皇昌泰四年の條。
- (21) 『扶桑略記』第二十三。『日本紀略』、延喜元年正月の條。
- (22) 坂本太郎著『菅原道眞』一一一ページ。
- (23) 所功氏「菅原道眞の配流」△『菅原道眞と太宰府天滿宮』上卷所收▽七七ページ〜九五ページ。
- (24) 『政事要略』卷二十一参照。
- (25) 猪口篤志著『日本漢詩』上(新釋漢文大系所收)、七〇ページ。内田泉之助著『明解日本漢詩文』一九二ページ。
- (26) 大江匡房(一〇四一〜一一二一)撰。群書類従本(續群書類従完成會刊)による。
- (27) 底本「鳥」に作る。『菅家後集』によりて改む。
- (28) 『林羅山先生文集』卷第六十五(平安考古學會、大正七年八月五日刊)。同文集、第二冊、三四〇ページ。
- 附記1 本稿は、昭和五十三年度文部省科學研究費(一般研究D)、昭和五十六年度文部省科學研究費(一般研究C)による研究成果の一部である。